

概念としてのグローバルの捉え方の違い
～東アジア圏における大学生の意識調査比較～

山田智久

本事業「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」において、発表者は大学生の意識調査を「グローバル」という概念の捉え方の差異から調査した。調査対象としたのは、日本、香港、台湾の3つの地域で学ぶ大学生で、それぞれの学生に、「グローバルという語から想像するものはなんですか」という質問を聞きデータは PAC 分析の手法に則り分析を行った。分析結果から次の傾向が明らかになった。

1. 日本人学生は「グローバルは日本ではないどこかで動いているもの」として捉えていた。
2. 香港の学生は、「自分が住んでいる地域がすでにグローバルな状態」であることを自覚しており、現在の状況からいかにして脱却し、よりよい環境を見つけ出すかに注力していた。
3. 台湾の学生は、「自分が意図せずとも台湾がグローバル化していつている危機」を感じるとし、香港の学生同様、どこか外で生きていける道を模索していた。

もちろんこれらの調査結果を以て一般化はできないが、グローバルという概念を考えるときに、良い面だけでなく危機感も付随することでグローバルという環境が成り立っていることが本調査から見えてきた。